

いきいきと運動する児童の育成

～基礎・基本の技能の定着と仲間とのかかわり合いを中心に～

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル

水谷博之

はじめに

近年、子どもの体力が低下する中で、小学校体育における運動への取り組み方がますます重要になってきた。今回の新学習指導要領体育編では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」と記され、多様な運動の基礎を体育の授業で扱う必要性が出てきた。そこで、小学校高学年「ボール運動領域」に焦点を当てて、研究することにした。

1. 今日的な教育実践課題について

(1) 仲間と協力できない子ども

「パス行くぞー！」

「ボールがうまく止められないよ!？」

これは、サッカーをしている子どもの一場面である。パスを出しても上手にコントロールできず、目の前を通るボールをただ見ているだけの子ども。また、こんな場面も。

「次は、パスをみんなで回してからシュートしようよ。」

「えー、どうせ途中で誰かがミスをするから、一人でシュートまで行ったほうがいいな。」

グループで攻め方の相談をしても自分だけ気持ちよくプレーできれば良いと考えている子ども。

このような場面が生まれてしまった背景には、室内ゲームの普及、遊び場の減少による運動に接する機会の減少などにより、幼少から遊びを通して集団で活動する時に自分がどうすれば良いのかを考えることなく育ってきていることに、大きな原因があると考えられる。そして、最近の体育の授業では、運動に積極的にかかわれない子どもの姿がよく見られるようになった。

また、最近の体育のボール運動について、次のような見解がある。

「ここ10年で戦術アプローチの考え方が広まってきたが、ゲーム水準の無理解のため、学習内容がゲームに機能しない例をよく見る。（傍線は

稿者、以下同じ）例として、バスケットボールの授業でよく見られるアウトナンバーゲームがあげられる。」（森，2011）

このことから考えられることは、初期の段階で「パスをみんなに回そう」といった指導では、子どもにとって困難な要求となり、次第に運動に対して積極的に取り組めなくなることになる。例に挙げたバスケットボールは、運動発生論的には個人のシュートから始まる運動であると考えられ、小学校では授業の始まりからパスを要求することが難しいと考えられる。

(2) 体力の低下に歯止めがかかっていない現代

近年、子どもの体力・運動能力は過去と比べると低下している。これは、文部科学省の「全国体力・運動能力調査の結果」からも明らかである。このような子どもの姿は、小学校学習指導要領解説「総則編」第1章「改訂の経緯」に記されている、「自分への自信の欠如や将来への不安、体力の低下といった課題」に当てはまる。

さらに「総則編」では、体育について次のように述べている。

- ・児童が自ら進んで運動に親しむ資質や能力を身に付け、心身を鍛える
- ・低・中学年において授業時数を増やす
- ・生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくこと
- ・体力の向上に関する指導の充実

このことから、小学校の体育の学習は、子どもにとってますます重要となった。

(3) ボール運動好きな学級の現状

－体育の授業づくりのポイント3項目－

現在、担任している5年生の学級(40人)に「体育の授業は好きですか」、「ボール運動は好きですか」と聞いたところ、次ページ【表1】のような結果になった。体育の授業やボール運動に対して、「好き」と感じている児童が多い。

学級を立ち上げる段階でドッジボールを授業で行ったところ、多くの児童が積極的にボールに

【表1 子どもへのアンケート】 (N=37人)

	好き	どちらか と言え ば好き	どちらか と言え ば嫌い	嫌い
体育は好き	27人	7人	2人	3人
ボール運動は好き	30人	4人	2人	1人

かかわろうとする姿が目立ったことから、体育の学習に対して前向きに取り組もうとする姿勢が見られた。しかし、ボールを投げたり、捕ったりする動作を見ていると、積極的に運動している子どもでも、ボールを上手に投げているとは言い難い動きが見られた。またドッジボールによく見られるコートのみで立っているだけの児童も見られた。

実際、平成22年5月に行った体力運動能力調査の結果【表2】からも分かります。運動の基礎となるいろいろな動きにおいて、最高記録と最低記録に大きな差がある。特に、「ボール投げ」の結果から、「投げる」動作において男女とも最高と最低の記録差が大きい。次に、「反復横とび」から分かる「敏捷性」にも同じような結果が表れている。(表2網掛け参照) この2つからも運動の基礎の技能の力量差があることは明らかで、これにより個人差が大きいと推察される。

そのような子どもたちの姿から、体育の授業で

【表3 体育の授業ポイント】

①ボールにかかわる状況を意図的に作ること
②自分のところにボールがきても自信を持って運動できる技能の習得
③協力することの楽しさを味わうことができるグループ作り

【表2 平成22年度の山吹小学校5年1組 体力運動能力調査の記録】

	握力 (kg)	上体起 こし(回)	長座 体前屈(回)	反復横 とび(回)	シャトル ラン(回)	50m 走(秒)	立ち幅 跳び(cm)	ボール 投げ(m)
男子平均	17.1	15.2	26.3	41.8	43.4	9.4	158.2	24.9
男子最高記録	30	24	42	50	80	7.7	213	42
男子最低記録	8	5	14	27	12	11.6	131	10
女子平均	16	17.4	34.4	37.3	36	9.4	151.7	14.5
女子最高記録	23	26	48	46	54	8.4	179	24
女子最低記録	9	6	24	24	23	10.4	123	6

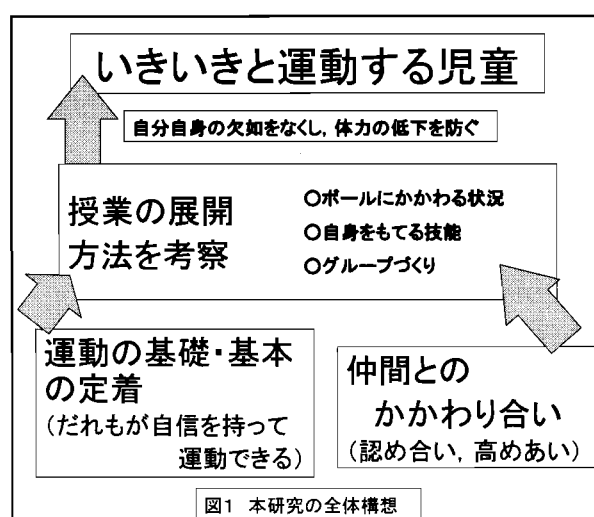
は、だれもがボールにかかわり、もっと運動したいと思えるような授業を展開する必要があると考えた。そのためには、【表3】の3つのポイントを意識した授業づくりが必要になると考えた。

2. 研究の概要

(1) 本研究のねらい

—いきいきと運動する児童とは—

本研究主題にある「いきいきと運動する児童」とは、運動を得意とする子ども、そうでない子どもの両者が、自らのレベルに合った課題をもって、いろいろな運動に精一杯の力を発揮して取り組む児童の姿をさしている。



そんな児童の姿を導き出すためには、体育の授業における「基礎・基本の技能の定着」と、「仲間とのかかわり合い」が味わえるような授業の展開を考察し、この2点が深まるような授業のあり方を研究することとする。どのような授業の展開、学習の手だてが有効なのかを【図1】のように考えた。今回は、「ボール運動領域」における「ネット型」「ゴール型」の単元で実践し、主題である「いきいきと運動する児童」の姿に迫りたい。

(2) 取り扱うボール運動の内容

ーなぜバレーボールとバスケットボールなのかー

平成 23 年度から完全実施される新学習指導要領では、これまでの学習指導要領で、「バスケットボール型」や「サッカー型」のように運動名を使って表現されていた分類が、「ゴール型」、「ネット型」といった形で表されるようになった。これは、各型共通の戦術的課題が学習内容になったためである。

そこで、新しく分類された「〇〇型」の学習について研究を進めたいと考えた。今回は、実践 1 を「ネット型」から、今後多くの学校が授業すると予想される「ソフトバレーボール」で、実践 2 を「ゴール型」の「ミニバスケットボール」で進めることにした。

ソフトバレーボールは、チームで一つのボールをつなぎ、相手コートに返すことを繰り返し行う運動である。動きの要素は、サーブ・レシーブ・パス・スパイクと様々あり、初めて運動する子どもにとってはとても技能を必要とする運動となる。今回の実践では、ルールを大幅に改良し、「キャッチしてもよい」「サーブは投げてもよい」といった形で進めた。これは、バレーボールの特徴でもあるネットを挟んで相手チームと攻守が交わらないことで「仲間とのかかわり合い」を子どもが意識しやすくなると考えたからである。

一方、バスケットボールは、一つのボールを敵味方が入り乱れながら、それぞれのゴールを目指して得点を競うゲームである。動きの要素は、シュート・ドリブル・パスとなり、小学校の体育の授業では、4 年生で学習の経験がある。

今回の実践では、ゲームを行う正規の人数では行わず、1 対 1、2 対 2、3 対 3 のミニゲームで授業を進めた。これは、だれもが必然的にボールに接する機会を与えることで、「基本の技能の定着」を目指したからである。

ボール運動では、集団で勝敗を競い合うところに、そのおもしろみがある。グループが勝利するためにはどんな作戦を立てればよいのか、自分がどんな役割を果たせばよいのかなど、活動中に多くのことを考えることで、集団の中での自分の役割や責任を果たすことを身に付けさせることも重要となる。活動を通して、子どもたちが仲間とのかかわり合いを感じてほしいと考えた。

(3) ボール運動における基礎・基本の技能

体育の授業には大きく 8 つの領域に分かれている。本実践では、その中の「ボール運動」に着目し、子ども一人一人の「基礎・基本の技能の定着」を目指して授業を行った。

基礎・基本の捉え方については次のように考える。まず、基礎は各種運動全体に関わる土台と考える。次に、基本はその運動の一部に必要な動きの基と考える。基礎は、その運動において運動全体に大きくかかわるが、基本は、運動のレベルや段階によって、あるいは攻守の違いによる中心や周辺によって変化するものであると考える。

今回は小学校のボール運動全体にかかわる技能を基礎とし、実践で行う運動に必要な動きを基本の技能と捉え【表 4】のように考えた。

【表 4 実践におけるボール運動の基礎・基本】

ボール運動の基礎技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボールを捕球する ・ ボールを投球する ・ ボールの正面に入る ・ 味方・敵の位置を認識 ・ 次の動きを予測する ・ 声を掛け合う(協力・定着・高める) 	↓ 低学年 ↓ 高学年
バレーボールの基本技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボールをはじく (オーバー・アンダーハンド) ・ ボールを強く打ち込む (スパイク・サーブ) ・ 連携してパスをつなぐ 	
バスケットボールの基本技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ ドリブル ・ パス (チェスト・ワンハンド) ・ シュート (ランニング・ジャンプ) ・ 相手の正面で守る (ハンズアップ) 	

(4) 研究の仮説と手だて

基礎・基本の技能を定着させる授業、仲間とのかかわり合いが充実した授業が、運動を得意とする子どもも、そうでない子どもも、「楽しかった」「次も頑張りたい」と思えるようになるために、「1. 今日的な課題 (3) 体育の授業ポイント 3 項目」の子どもの実態で述べた授業のポイントを踏まえて、授業の展開をする上で次ページのよう

な仮説と手だてを考えた。

この手だてを単元構想の中に組み込み、主題である「いきいきと運動する児童」に迫りたい。

【仮説1と手だて】

【仮説1】

運動の基礎・基本の技能を身に付けることで、個々のモチベーションを高め、どの子どもも楽しく取り組めると考える。

【手だて1】

各運動の基礎・基本の技能の定着を図るために、授業内に「スキルアップタイム」を設ける。

【仮説2と手だて】

【仮説2】

仲間とのかかわり合いが深まることで、意欲的に活動に取り組んだり、失敗を恐れずに活動したりすることができると思う。

【手だて2】

次時への意欲付けや目標を立てるときに役立たせるため、授業中に友達からかけられた言葉を記入できる「学習カード」を活用する。

それぞれの手だてについて、具体的な内容を次の通りである。

【手だて1】

各運動の基礎・基本的な技能の定着を図るための、「スキルアップタイム」とは

「スキルアップタイム」は、運動の基礎・基本の動きを高める時間である。主運動に必要な最低限の技能を、回数や時間、人数を決めて活動していく。

【手だて2】

授業中に友達からかけられた言葉が記入できる「学習カード」の活用とは

学習カードを活用することで、子ども同士の「認め合い」や「技能や動きの着眼点の自覚」、「運動に必要なキーワード」をはっきりとさせる。これらを記録として残すことで、活動への意欲や技能の高まりを図る。

(5) 体育における「かかわり合い」

本研究では、体育科の授業の中での「かかわり合い」の場面を、次のように位置づける。

一つ目は、指示する言葉や励ます言葉、擬態語などの言葉など、言葉で相手とかかわる場面であ

る。二つ目は、必要な技能や動きを、キーワードを使いながら動きのポイントに着眼させること、それを表現してかかわり合いをもたせる場面である。三つ目は、グループ活動の中で子ども同士による手本やモデルとなる体の動きを示させることで、言葉とは別な形で体育におけるかかわり合いを促す場面である。

こうしたかかわり合いは、授業中に勝利したときの喜びや、負けたときの悔しさを仲間とともに共感することで、次の活動に意欲付けに影響を及ぼすことになる。このような多様な「かかわり合い」と活動を取り入れることで、子ども同士のより深い「仲間とのかかわり合い」を身に付けさせたいと考える。

3. 実践研究の報告

本研究では、「2. 実践の概要」で述べた考え方に基づき、「ボール運動領域」における以下の2つの実践を行った。

実践1：ソフトバレーボール

実践2：ミニバスケットボール

本誌では、両実践の報告をする。

(1) 研究の対象

名古屋市立山吹小学校 5年1組 40人

(男子18人、女子22人)

(2) カリキュラム上の運動の順序

今回の実践は、1学期ソフトバレーボール、2学期ミニバスケットボールの順で取り組んだ。理由は、「2. 研究の概要(2) 取り扱うボール運動の内容」で示したことや、学級経営の観点から、相手グループと入り乱れない「ネット型」の運動を先に行うことにした。1学期に「仲間とのかかわり合い」を意識させることで、グループ活動の進め方を子どもに理解させることができると考えたからである。次に「ゴール型」の運動の中では、仲間とかかわり合いながら一人一人の「基本の技能の定着」を重点に置くことにした。

この実践の順序を進めることで、励ましたり、アドバイスしたりしあえる仲間づくり、技能を高めあえる仲間づくりができることを目指した。

(3) 子どもの授業の様子

－1学期実践：「ソフトバレーボール」－

平成23年度から始まる新学習指導要領では、「ボール運動」の領域において「ネット型」が明

時間	1・2	3・4・5	6・7・8	9・10
15分	《スキルアップタイム》 ○一人で行う内容 ・壁当てキャッチ ・壁当てパス		《タスクゲーム②》 ○方法 ・4対4でパスリレー (ネット越しにパスをつないでまわす)	《リーグ戦》 いろいろなグループと対戦 (6人制)
30分	○二人で行う内容 ・はじいてキャッチ ・はじいてパス (オーバーハンド・アンダーハンド)	《タスクゲーム①》 ○方法 ・4人でパス (レシーブ・トス・スパイクの流れ)	《ゲームタイム》 ○方法 1チーム5人でゲームを行う。(時間制限)	

【図2 ソフトバレーボールの単元構想表】

記された。これまでは、「ソフトバレーボールかソフトボールを取り入れてもよい」と表記されていたのが、共通の戦術的課題による「○○型」と表記され、確実に実施することになる。今回の実践では、ネット型の学習の進め方を、「2. (4) 研究の仮説と手だて」に基づいて進めていった。単元構想及び、学習内容は上段【図2】に示した。

①難しい動作に戸惑う子ども

－《手だて1》スキルアップタイム－

バレーボールの動作は、これまで小学生が取り組んできたバスケットボールやドッジボールなどと違い、「ボールをはじく」動作が必要となる。実は、このはじく動作はとても困難な動作で、多くの子どもがここでつまづいている。

キャッチするだけでなく投げるわけでないこの動作を、子供の活動の様子から、次のような段階で区分けしてみた。

I	オーバーハンドやアンダーハンドで安定したパスできる
II	オーバーハンドやアンダーハンドで返すことができる
III	オーバーハンドまたは、アンダーハンドのどちらかで返すことができる
IV	ボールの下に移動してボールに触れることができる

この4項目に対して、子どもの実態は【表5】のような結果であった。

【表5 子どもの実態】 (N=40人)

I	II	III	IV
2人	10人	25人	3人

そこで、【表6】のような内容でスキルアップに取り組ませた。

多くの子どもが、基本の動きに戸惑い、パスの

【表6 スキルアップの内容】

○一人で行う 壁当てキャッチ 壁当てパス	○二人で行う はじいて キャッチ (オーバー・アンダー)
----------------------------	---------------------------------------

つながりを欠いてしまう状況が続いたため、はじく動作を無理に行わずに、ボールをキャッチしてからパス動作に入ってもよいことにした。実際、単元の後半に行ったゲームの段階まで、このルールは残さざるを得なかった。



②励ましの言葉に終始したカード記入

－《手だて2》学習カード－

単元前半は個人カードを使って学習の記録をとらせていったが、残念ながら大きく技能記録の伸びは見られなかった。これは、前述したとおり「はじく動作」の難しさから子どもの運動への反応が鈍く、取り組みに集中力を欠いていたのが本当のところである。やはり、動きができれば楽しいと思える運動と、そうでない運動の差が如実に表れた結果だといえる。

そこで、後半はグループカードに変更し、特に友達から言われた動きの参考になる言葉や、がんばろうと思える言葉に注目した。しかし、励まし

や賞賛の声はあがるものの、技能的なアドバイスは少なく、抽象的な言葉で終わっていた。

③ゲームで盛り上がりを見せた子ども

－単元全体を通した子どもの様子－

単元途中からゲームに取り組ませるように授業構想を変更し、グループの仲間とのつながりを意識させた活動に転換したことで、うまくパスが繋がらなくても「気にするな」とか「次頑張ろう」と励まされる場面や、徐々にグループの動きに合わせてようと取り組む場面が見られた。グループの仲間が上手に動くと「よし、その調子」などと言われ、積極的にボールに触れようとする姿も見られ始めた。仲間との関係も認め合いができるようになってきた。

④授業構想の甘さが際立った「ネット型」の授業

－単元を終えての反省－

授業全体を通して、授業の構想段階での甘さを感じた。これは、子どもの実態を掴みきれずに始めてしまったことや、子どもの取り組みたいと思えるような展開をしなかったことが原因と考えられる。技能を高めることも、仲間とのかかわり合いも不十分なまま単元を終えてしまったのが、私の率直な実感である。特に「タスクゲーム」を、曖昧な内容で進めたために、子どもにバレーボールの特性を理解させるまでにいたらなかったことが大きい。

小学校で「ネット型」に取り組む際には、十分な教材研究とともに、道具の選定、グループを検討してから授業に臨むべきである。

－2学期実践：「ミニバスケットボール」－

1学期のバレーボール実践の反省から、バスケットボールという運動を見直した。始めから集団

単元の流れ 1時間の流れ	1	2・3・4	5・6・7	8・9・10
15分	オリエンテーション	スキルアップタイム		
		タスクゲーム① 1対1	タスクゲーム③ 1対1	タスクゲーム④ 1対1
作戦タイム グループごとに 個人技能の向上		作戦タイム グループごとに個人・ グループ技能の向上	作戦タイム 前半の反省と個人・グ ループ技能の向上	
30分		タスクゲーム② 1対1	主ゲーム① 2対2	主ゲーム② 3対3

【図3 ミニバスケットボールの単元構想表】

の動きを意識して取り組んだバレーボールでは、個々の技能が追いつかずゲームに進展が見られなかった。そこで、ミニバスケットでは、ドリブル、シュート、パスにおける個々の動きを重視した学習活動の展開を取り入れようと考え、ページ下段【図3】のような単元を構想した。

①仲間と協力して進め技能を高める

－《手だて1》スキルアップタイム－

ミニバスケットボールについては、子どもたちも4年生で経験している運動である。ソフトバレーボールと違い、ある程度の動きやルールは理解している。しかし、個々の動きを見ているとソフトバレーと同様にできる子ども、できない子どもの差がある。バスケットボールに必要なドリブル動作について次ページのような段階で分けけしてみた。

I 体のそばで両手ともにドリブルができる
II 体のそばで片手のどちらかでドリブルができる
III どちらの手でも、ボールを見ながらならドリブルができる
IV 片手でドリブルができる

この4項目に対して、子どもの様子は【表7】のような結果であった。

【表7 子どもの実態】

I	II	III	IV
4人	7人	26人	3人

この状況とソフトバレーボールの実践の反省から、技能を高める運動を一人一人がばらばらで行うのではなく、グループ活動を通した運動に変更することができないかを考えた。

そのためには、グループ活動を楽しむことができること、記録の伸びが一目瞭然になることが必要と判断し、次ページ【表8】のような運動に取り組ま

【表8 スキルアップの内容】

- ・その場ドリブル10, 10, 10
- ・ドリブルリレー
- ・パスパス2往復
- ・ジグザグドリブルリレー

た。毎回授業の始めに準備運動もかねて行い、グループごとにかかった時間を測らせた。集団の意識を持たせることと、個人の記録だけで測ってしまうと集中



【写真2 スキルアップタイムの様子】

してけなされる子どもがいるといけなく考え、このような形で記録をとった。この4つの運動で、ドリブル、パスの基本動作を押さえることができた。上手な子どもの動きを参考に、苦手な児童も努力をすることができたし、相互の励まし合いも見られた。どのグループも授業を進めるに従ってタイムの伸びが見られた。タイムが上がるにつれて「今日は〇〇秒を目指すぞ」と言った声も上がり、一人一人の動きも活発になった。

今回の実践では、シュートはあまり重点に置かなかった。これは、シュートをだれもが打つ気になるよう、通常のリングより大きいサイズで取り組んだためである。また、業前の休み時間を活用して、シュート練習をするように多くの子どもに声をかけたためでもある。これにより、普段あまりボールにかかわろうとしない子どもでも、積極的に練習している姿が見られた。

②気づいた時に書き込めるカード

－《手だて2》学習カード－

今回は、記述をできるだけ簡単にしたいこと、グループのだれもがすぐに読むことができることを考え、グループカードのみにした。スキルアップの記録では、毎時間同じカードに記録することで前回からの伸びが分かり、子どもたちは「きょうは〇〇秒を目指すぞ！」とグループで声を掛け合いながら取り組んでいた。また、「動きのコツ」コーナーを設け、気付いた事をどんどん書かせた。これにより、「ピボット」や「リバウンド」といった、技能的な言葉の記述が増えた。

③主ゲーム以外にも盛り上がったバスケット

－単元全体を通した子どもの様子－

今回のミニバスケットボールの授業では、ソフトバレーボールの実践とは違い、単元構想を当初から変更せずに進めることができた。

子どもの全授業終了時の反応を見ても「もう終わりなの」「もっと続けたい」といった声が多く聞かれ、一人一人の子どもが、この授業である程度ミニバスケットボールに自信を持つことができたと感じている。これは、「タスクゲーム」において、少ない人数の動きから段階を踏んだことで、だれもが積極的にボールな仲間とかかわりあえたと考える。

④授業構想が一貫してできた「ゴール型」の授業

－単元を終えての反省－

今回の実践で痛感したのが、単元構想をしっかりと立てることの重要性である。ソフトバレーボールの実践での失敗が、今回のミニバスケットボールの実践に生きたと感じている。もし、よくあるゲーム中心の単元構想で授業を進めてしまうと、能力の高い子どもだけが活躍する授業になってしまい、本来の私の狙いと食い違ってしまったと実践後に感じた。

(4) 両実践の考察

ソフトバレーボールの授業について、次の①～④の質問をし、子どもから【表9】のような回答を得た。

- ① ソフトバレーに取り組む前に、やってみたく思ったか
- ② スキルアップタイムは役立ったか
- ③ カードは役に立ったか
- ④ 授業を終えて楽しかったか

【表9 アンケートの結果】 (N=40人)

回答	はい	まあはい	まあいいえ	いいえ
①	29人	9人	2人	0人
②	15人	21人	4人	0人
③	9人	17人	9人	5人
④	33人	5人	1人	1人

この結果から、学習カードがうまく機能していなかったことが明らかとなった。カードに何を記入してよいのか、カードに記入したことを次時にどう活用するのかが分からなかったことが原因と考えられる。

しかし、授業全体は授業を始める前より、やっ

てよかったと思う子どもが増え、全体としてはソフトバレーボールを仲間と取り組むことができたものと思われる。しかし、ルールの簡素化により、ゲーム水準の高まりが見られなかったことが私の中の反省としてあるので、授業としては、残念ながら失敗したと思っている。

次にミニバスケットボールの授業についても①～④について子どもに質問し、【表10】のような回答が得られた。

- ①ミニバスケットボール取り組む前に、やっていたか
- ②スキルアップタイムは役立ったか
- ③カードは役に立ったか
- ④授業を終えて楽しかったか

【表10 アンケートの結果】 (N=39人)

子どもの回答	はい	まあはい	まあいいえ	いいえ
①	21人	8人	10人	0人
②	20人	14人	4人	1人
③	14人	17人	6人	3人
④	31人	7人	0人	1人

この結果から、スキルアップ、学習カードともに3/4程の子どもが役立ったと回答していることから、動きが生かされたことや、記入したことが次の活動に生かされたことが分かった。

また、毎回タスクゲーム(1対1)を行ったことで、スキルアップで取り組んだ動きの重要性が分かり、集中して取り組むことができた。さらに、スキルアップをタイムで表したことで、記録の伸びがわかりやすくなったことが意欲的に取り組めた要因に挙げられる。

ミニバスケットボールは、すべてがグループ活動であったため、グループの一体感を感じ、仲間への思いやりや励ましあい、助け合いができたと考えられる。10時間授業を進め、毎回どのグループからも歓声が上がり楽しく運動できたことが伝わってきた。

4. 成果と課題

「いきいきと運動する児童の育成」を目指し、小学校体育科、ボール運動領域「ネット型」「ゴール型」での実践に、「2. 研究の概要(4) 研究の仮説と手だて」に基づいて取り組んできた。

まず、それぞれの仮説を達成するために、手だ

てに沿って本研究を進め、そこに現れた成果と課題を次のようにまとめる。今回の実践では、「ゴール型」の実践において成果が見られ、「ネット型」の実践において課題が明確になったため、成果と課題を実践別でまとめた。

「ゴール型」で取り組んだミニバスケットボールの授業では、次のような成果があげられる。

《手立て1, スキルアップタイム》

- ◎グループでの活動にしたことで、仲間への声かけや、記録向上に対する関心が高まり、授業への意欲が増した。
- ◎運動上位者が、記録を向上させるためには、自分だけが上手にできるだけではいけないことに気づき、仲間へのアドバイスをするようになった。
- ◎運動下位者は、上位者にアドバイスをもらうことや、間近で活動の様子を見ることで動きを身に付けることができるようになった。

《手立て2, 学習カードの活用》

- ◎1枚のカードに仲間のだれもが記入することで、共通した動きのよい点を確認でき、それを自分の動きに生かすことができた。

また、「ネット型」のソフトバレーボールの実践から、次のような課題があげられる。

《手立て1, スキルアップタイム》

- 個人の動きでオーバーハンドやアンダーハンドに取り組ませたことで、活動が単調になり、また、仲間の動きに注目できなかった。
- 仲間と協力してカードに記入することができず、記録の伸びまで感じるができなかった。

《手立て2, 学習カードの活用》

- どんな動きがバレーボールに必要なのかが分からないまま記入していたため、動きの良さを見つけて記入することができなかった。

また、今回の実践では、2つのボール運動を違う単元構想で展開した。両実践で「タスクゲーム」と位置付けた学習内容では、次のようなことが分かった。段階を踏まず、曖昧な進め方をしたソフトバレーボールの実践では、子どもたちに明確な目標を与えることができず、戦術の理解までは

いたらなかった。段階を踏んで取り組んだミニバスケットボールの実践では、子どもたちに攻めや守りの意識が生まれ、主ゲームに生かすことができた。両実践終了後の12月に、それぞれの手だてについて、ソフトバレーボールとミニバスケットボールのどちらの単元構想が技能の高まり、仲間とのかかわり合いを感じる事ができたか、子どもにアンケートを行った。アンケート内容は次の①～⑥の項目である。

- | |
|-----------------------------------|
| ①スキルアップタイムは、技能を高めるのに有効だったか |
| ②スキルアップタイムは、仲間とのかかわり合いを深めるのに役立ったか |
| ③スキルアップタイムは、自分の動きを高める参考になったか |
| ④学習カードは、技能を高めるのに有効だったか |
| ⑤学習カードは、仲間とのかかわり合いを深めるのに役立ったか |
| ⑥学習カードは、自分の動きを高める参考になったか |

アンケートの結果は【表11】のようになった。

【表11 アンケートの結果】 (N=39人)

	両方	バレーボール	バスケットボール	どちらも違う
①	13人	10人	16人	0人
②	12人	5人	22人	0人
③	13人	5人	21人	0人
④	11人	2人	21人	5人
⑤	7人	9人	19人	4人
⑥	15人	5人	17人	2人

両方ともを選んだ子どもが多いのが目立つが、どちらかを選んだ子どもの人数を比較してみると、ほとんどの項目がバスケットボールの方を選んでいることが分かる。特に、②の「仲間とのかかわり合い」の感じ方や③「動きを高める参考になったか」のアンケートでは、圧倒的に多いことから、仲間と協力し合ったスキルアップタイムの進め方が子どもにとってよかったことが分かった。また、④の項目では、記入しやすいカードにしたことが功を奏したといえる。

最後に、本研究では、学級経営を踏まえて、「仲間とのかかわり合い」を考えたカリキュラムの順序についても考察していった。今回のソフトバレーボール、ミニバスケットボールの順序で進めたことは、授業を終えた今、子どもたちの様子を振り返ると次のような手応えを感じてはいるが、順序の有効性までは明らかにならなかった。

ネット越しに対戦するソフトバレーボールの

ゲームでは、グループの一体感を感じながら進めている様子が見られた。この活動中にもともに喜んだり、動きのアドバイスがあたりしたことは確かである。もう少し、単元構想を練って授業を行えば、より小学校高学年で求められる正規のバレーボールに近づけたと考える。

その後に取り組んだ、攻守が入り乱れるミニバスケットボールでは、ネット型での仲間意識の経験が生きて、仲間の動き見ているときのアドバイス活動が活発であった。

このことから、今後の小学校体育の授業カリキュラムの段階的な位置付けを課題の一つとしてあげたい。

以上のことから、本研究では、成果と課題が明確になり、自ら立てた手だてや単元構想は子どもにとって、ある程度の有効性があると考え、主題の子どもの姿にせまれたと考える。しかし、カリキュラムの順序については、「ネット型」から「ゴール型」の流れの有効性を解明することはできなかった。この点は、今後も研究を進めたい。

終わりに 一実践から提案できること一

(1) 子どもたちの技能の定着

それぞれの運動の技能を定着させるためには、単元の活動だけでは難しい。行前や休み時間といった体育の活動以外の時間の活用が重要になると考える。

そして、体育の授業では、その時間に体を動かしたくなるような授業を展開することが、我々教師には求められる。「これなら休み時間にもできそうだ」と思えるような、子どもに分かりやすい活動内容、「次は体育だから早く体育館に行って練習しよう」と思える授業展開の方法など、子供たちの技能の定着を目指すために、常に考えていなくてはならない。

(2) 体育におけるグループ作りと学級経営

体育の授業では、グループ作りが活動を進める上で大きな要因の一つとなる。私は、学級のだれとでも協力し合える仲間になってほしいという願いをいつももっている。

しかし、グループの能力差があまりにも大き過ぎるとやる気をなくす子どももいる。普段の仲良しグループはあまり考慮に入れずにグループを作ると、活動がスムーズにできない子どももいる。

そんな子どもにグループ活動をさせるためには、普段の学級経営と大きくかかわる部分が多い。普段の様子から、だれとだれが仲良しで、だれがリーダーシップを発揮するなどを見つけ出し、おかないといけない。

体育を通して、「自分への自信の欠如を認めつつ、仲間とのかかわり合いをもち、将来への自身をもたせる」ためには、学級における子どものかかわり合いを他教科以上に重視する必要がある。そういう意味では、体育は教師の学級経営力との関係が他教科より深い教科だと感じている。普段から子どもをよく観察し、子どもに触れ合う活動を通して、子どもの本質を見抜く力を我々教師が身に付けなくてはならない。要するに子どもとの「かかわり合い」を我々教師がさらに磨き、子どもの能力を見抜く「技能の定着」を日々切磋琢磨する必要がある。

(3)「ネット型」のカリキュラム試案

ーソフトバレーボールの授業実践よりー

私がなぜバレーボールにこだわったかという、教職大学院の実習でいった中学校の体育の授業に端を発する。そのとき、中学校の体育教師にこう言われた。「中学校でバレーボールを始めても、1年生でパスの仕方、2年生でゲームの流れを覚えて終わり、3年生でようやくバレーボール本来の楽しさが分かる。しかし、楽しさが分かったときにはバレーボールの授業は終了してしまうことが多い。小学校である程度のルールや技能が身に付けられればもう少し早い段階でバレーボールの楽しさを味わえる子どもが増えると思う。」これを聞いてから、研究対象になるのではと考えた。

しかし、実際に授業を進めてみると、動きの難しさからくる子どもの戸惑い、運動経験のなさからくる動きの判別など、小学生には難しい一面があることが分かった。そこで、ゲームの流れや簡単な動きを、小学校段階で教えることが必要だと

考える。【表12】は、小学校3年生から6年生までのネット型ボール運動カリキュラムを、私見ではあるが考えてみた。

付記

教職大学院において、このような研修の機会を与えてくださった名古屋市教育委員会にお礼を申し上げるとともに、現任校の一柳慶一校長先生をはじめとする教職員のみなさまには、研修にご理解・ご協力をいただき、大変感謝しております。この教職大学院で学び得たことを、現場に還元できるように努力していきたいと思えます。

また、課題実践研究の計画を進めるにあたり、ご指導をいただきました教職大学院佐藤洋一先生、吉田淳先生、本学体育科の森勇示先生をはじめ、諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

主な参考文献

- 『小学校学習指導要領解説 総則編』(文部科学省 2008.8)
- 『小学校学習指導要領解説 体育編』(文部科学省 2008.9)
- 『小学校学習指導要領』(文部科学省 2008.3)
- 『小学校学習指導要領解説 体育編』(文部科学省 2008.9)
- 『中学校学習指導要領解説 体育編』(文部科学省 2008.9)
- 松田岩男著『現代の体育理論』(大修館書店 1985.4)
- 高橋健夫・岡出美則他著『体育科教育学入門』(大修館書店 2002.4)
- 藤崎敬・中川一著『小学校体育⑧図解・実践』(東洋館出版 2000.5)
- 池田延行・戸田芳雄著『小学校新体育科授業の基本用語辞典』(明治図書 2000.7)
- 日本ソフトバレーボール連盟編著『ソフトバレーハンドブック』(大修館書店 1992.7)
- 森勇示「ゲーム様相の発展過程に基づいたバスケットボールの指導計画の考案—吉井の「初心者に対する速効的指導法」を手がかりに—」(愛知教育大学研究紀要 第32輯 2007.3)
- 渡邊彰・今関豊一著『小学校新学習指導要領の展開 体育科編』(明治図書 2010)
- 『中学校教育フォーラム』2011 冬号 36～37 項
- 「発生論としての学習過程」(大日本図書 2011.1)

【表12 小学校でのネット型カリキュラム試案】

学年	ネット型の運動	身に付けさせたい動き
3年	プレルボール	【対人型の簡単な動き】 ・ボールを打ち込む ・対人型に慣れる
4年	キャッチバレーボール	【運動の流れをつかむ段階】 ・ゲームの流れ ・仲間との連携
5年	ソフトバレーボール	【ラリーを楽しむ段階】 ・アンダー、オーバーハンドでつなぐ
6年	ソフトバレーボール	【正規ルールにせまる段階】 ・3段攻撃を目指す